



国立大学法人

**長崎大学**

NAGASAKI UNIVERSITY

プレスリリース

平成23年7月15日

**山下教授の福島県立医科大学副学長就任に伴う記者会見について**

お知らせしておりました標記の記者会見について情報提供いたします。

福島県立医科大学理事長 菊地 臣一

「福島県立医科大学副学長へお迎えするにあたって」

福島県立医科大学副学長・医科大学特命教授

長崎大学医歯薬学総合研究科教授 山下 俊一

「福島県立医科大学副学長就任にあたって」

長崎大学長 片峰 茂

「山下俊一教授の福島県立医科大学副学長就任に寄せて」

【問い合わせ先】

長崎大学広報戦略本部 深尾 電話 090-8115-6221

※会見会場の写真をご希望される場合はご連絡ください。

2011年7月15日

福島県立医科大学副学長へお迎えするにあたって

本学は、本日、広島大学と長崎大学から、お二人の副学長を新たにお迎えすることとなりました。

お二人は、広島・長崎における原爆被災者の医療などを通じて、放射線が健康に与える影響に関する知見を積み重ねてまいりました。山下副学長は、原発事故後のチェルノブイリを100回以上訪問し、延べ20万人の診断治療を行うなど、放射線健康影響に関する第一人者です。一方の神谷副学長は、放射線生命科学の専門家であり、日本放射線影響学会の会長も務めておられる、この分野の権威です。お二人とも、今回の福島原発の事故に当たって、いち早く福島県に入り、放射線に関する知識の普及、本学の被ばく医療体制の整備などに御尽力いただいております。

お二人を副学長として本学にお迎えすることを決めたのは、原発事故後の福島県を本格的に復興していくために、本学に重い責務が課されているからです。県立の医科大学として、本学は、福島県が実施する県民健康管理調査をお引き受けすると同時に、万が一、県民の皆様放射線による健康影響が発生する可能性が生じた場合に備えて、万全の医療体制の構築を進めていかなければなりません。

このためには、ALL JAPANによる医療支援体制、研究体制を構築する必要があります。また、世界の知恵も結集させていかなければなりません。その中核を本学が担うためにも、お二人をお招きすることが最善の道であると考えました。その一環として、9月11日、12日に放射線と健康リスクに関する国際専門家会議の開催を予定しており、この会議を皮切りに、お二人の力で国際的な連携協力体制の構築を進めていく計画です。

本学は、今回の震災に伴う歴史的使命を全力で果たしていく覚悟でございます。お二人の副学長には、その要として重責を担っていただきますので、みなさまにも御理解と御協力をお願いいたします。

福島県立医科大学理事長 菊地 臣一

2011年7月15日

### 福島県立医科大学副学長就任にあたって

3月11日、未曾有の東日本大震災に引き続き起きた福島原発事故は今なお収束に至らず、4カ月を経過しました。この間、福島県における避難住民はじめ被災者は、塗炭の苦しみと同時に、放射線や放射能に対する恐怖で悩まされ続けています。当初から現場を歩き、危機管理と健康リスクについて対話や講演を続けてきました。差別や偏見、さらに情報洪水による風評被害に加えて、被災者の精神的ダメージは大きなものがあります。

そのなかで、長崎大学と福島県立医科大学の学術交流協定に基づき、長崎大学グローバルCOE『放射線健康リスク制御国際戦略拠点』の迅速かつ的確な展開を、被ばく医療支援を中心に推進しています。このたびの赴任で、福島県における諸問題の解決に加えて、中長期的な健康管理問題に原爆医療やチェルノブイリの教訓を生かすべく、本格的に現地体制の整備に貢献する所存です。国内関係機関や各省庁との共同作業に加えて、海外との連携を強化し、低線量放射線被ばくの人体影響の解明による診断技術や治療技術の確立や被災者の健康増進プログラム策定と人材育成に尽力し、福島県を日本一の健やかな長寿県にすべく尽力したいと存じます。

長崎からの福島応援団の一人として、ご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

福島県立医科大学副学長・医科大学特命教授

長崎大学医歯薬学総合研究科教授

山下 俊一

2011年7月15日

山下俊一教授の福島県立医科大学副学長就任に寄せて

3月11日の東日本大震災発生以来、長崎大学は、福島県立医科大学との強い信頼関係のもと、福島県において被災地医療支援、緊急被曝医療、放射線健康リスク管理など多方面にわたって活動を行ってまいりましたが、4カ月を経過した今日、こうして本学の山下俊一教授が福島県立医科大学副学長に就任するという大きな節目を迎えることとなりました。長崎大学長として、大変感慨深いものがあります。これを機に、両大学の絆がこれまでも増して太く強いものとなり、福島県民の皆様の健康と安全への貢献に大きく繋がることを確信しています。

今回の大震災は、長崎に生まれ育った私たちにとって他人事ではありませんでした。大津波で無に帰した海岸沿いの町並みを映す映像は、66年前の長崎の原子野の光景と二重写しに見えまして、それに続く福島原発の事故は原爆禍を想起させました。そのなかで、原爆による被災とそこからの復興の経験や、被災直後からの被曝医療や被曝健康影響研究の蓄積を、ぜひとも福島に役立てて頂きたいと思いました。

確かに、放射線の健康影響については解明されていないことが多く残っています。しかしながら、私たち人類は、ヒロシマ・ナガサキ、そしてチェルノブイリと、悲しく、大きな経験から多くのことを学びました。長崎の医学者は、原爆被曝医療や被曝健康影響研究に始まり、チェルノブイリにおける被曝医療や健康調査、そして人材育成にも大きな貢献を果たしてきました。それを最も体現する医学者が、山下教授です。

山下教授は研究科長や重点教育研究プロジェクト・リーダーを務めるなど、長崎大学の最重要人物であります。本学にとって大きな痛手ではありますが、ご本人の強い希望もあり、福島に赴任していただくことを決断いたしました。山下新副学長には、福島県立医科大学の教職員及び福島県民の皆様のご理解とご支援のもと、思う存分力を発揮していただきたいと心より願っています。長崎大学は、今後も福島県立医大との連携を深め、これまで以上に、福島県の復興に向けた支援を続けてまいります。

長崎大学長 片峰 茂